

廣池千九郎と同時代人—アルバート・アインシュタインと道徳的生活

ピーター・ラフ

(訳：竹内啓二)

本発表では、アインシュタインを、彼の倫理的な信念、科学の研究者に対する協調性、量子力学との関係、私生活、廣池千九郎との関係という5つの観点から見た。

アインシュタインの倫理的な信念としては、彼の平和主義が知られているが、それは彼の人生の初期に遡れる。第一次世界大戦と1920年代の間にその信念は明白に表明されたが、ヒトラーの登場によって、そのまま保持されなかった。実際、1939年、ヒトラーが最初に原子爆弾を手に入れることを恐れて、アインシュタインはその開発を提唱したのである。

アインシュタインは、科学の研究者に対する協調性においては、はるかに首尾一貫していた。彼の研究者への協調性は注目に値する。ヴェルナー・ハイゼンベルグとサティエンドロナト・ボースとの関係は、彼の謙虚さ、よいユーモアのセンス、そして特に寛大さを示している。

量子力学に対する彼の揺らぐことのなかった疑念はよく知られている。しかし、なぜ彼が「神は宇宙に関してサイコロを振らない」という信念を強くもっていたのかは複雑な問題である。彼はニュートンにまで遡れる厳密な決定論の流れを受け継ぐと考えていたが、量子力学は、彼の想像力の働き、そして、「思考実験」という言葉で明白に表現されている、問題を心に描く彼の能力を弱めるものであったので、彼を深く困惑させた。おそらく、最も深いレベルでは、偶然性(ランダムネス)を高めることを支配的な位置におくことによって因果律を弱めることは、ヒトラーの時代において、それが含んでいる道徳的生活に対する意味合いからして、まったく受け入れられないものであったのであろう。

彼の私生活、特に最初の妻との関係は、彼の性格の最も問題の多い側面が現れたものである。距離を置くとか、無関心であるばかりか、実際に、無慈悲、残酷な行動をすることができた。他者へのこのような行動の影響は、特に彼の下の子どもに対する影響は、時に破壊的であった。

アインシュタインは日本に1922(大正11)年の終わり頃に1ヶ月間滞在し、彼が見聞したことを賛美している。彼は廣池千九郎に会っていないが、モラロジーの観点からアインシュタインの人生を見ることは興味深い。科学的、倫理的に言って、アインシュタインは純粋な人であったが、彼の倫理は抽象的な人類にかかわるものであり、生身の人間にかかわるものではなかった。廣池にとっては、生身の人間とのかかわりこそ、慈悲の実践の本質であった。